

## 高低差ゲイト（薩摩ゲイト）内哺育子牛における下痢および貧血の発生状況

松元里志

（第41回西日本畜産学会講演要旨）1990. 11. 6. 佐賀市はがくれ荘

**目的：** 入来牧場では周年放牧方式で生産される黒毛和種子牛の哺育期における発育を改善するため、母牛の母性行動と子牛の集団行動習性を利用した高低差ゲイト（これを薩摩ゲイトと名付けた）による親子分離哺育を行っている。しかしながら、ゲイト内は午前と午後の哺乳時間帯に多くの母牛が集まるため、母子の共存地区に糞尿が集積するなどの原因も加わって、下痢や貧血が多発する傾向にあり、これらの改善策が不可欠となっている。

本研究では、薩摩ゲイト内哺育子牛の下痢および貧血の発生状況を季節や年齢別に分析し、予防対策をたてるための基礎資料を得ようとしたものである。

**方法：** 1988年5月から1989年5月までの間に、薩摩ゲイト内で哺育された黒毛和種子牛97頭について、下痢および貧血の発病日齢、発病期間および生時から離乳時までの間の1日当り増体重（DG）を調査した。貧血は月2回の採血および子牛の健康状態の観察による採血で得られた血液を用い、ヘマトクリット値を測定し、その値が25以下に低下したものを貧血として治療した。

**結果：** 1回目の下痢の発生率は春季、夏季、秋季および冬季でそれぞれ59.2%、68.2%、88.2%および70.6%で高く、2回目の発生率は低下するものの、秋季ではなお44.4%であった。1回目の貧血の発生率は、春季、夏季、および秋季がそれぞれ61.2%、100%および66.7%で高く、冬季には低下した。2回目の発生率は低下したが春季および夏季でそれぞれ16.3%および13.6%であった。1回目および2回目の下痢が発生する日齢のピークは、それぞれ11から20日および31から40日であった。1回目および2回目の貧血が発生する日齢のピークは、それぞれ31から40日および61から70日であった。1回目の下痢の発病期間は季節間で有意な差が認められ、秋季に長くなる傾向を示した。子牛のDGは季節間および下痢や貧血の発病回数間で有意な差は認められず、薩摩ゲイトによる発育改善効果が認められた。

以上のことから、ゲイト内の環境浄化を含め、主として下痢防止技術を確立することにより、本方式による周年放牧牛の子牛哺育は有効であると考えられる。